

新しいふれあい社会

～We are not alone～

認定NPO法人東葛市民後見人の会

障害者委員会情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局 我孫子市湖北台 6-5-20

平成 28 年 3 月発行（第 24 号）

Tel/Fax 04-7187-5657

サンアロウ物語

樋場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

サンアロウ？ それは高齢の 3 人の男性が、太陽のように明るく元気に、3 本の矢のように固く結ばれた実績をたたえた愛称です。3 人の太陽 (SUN) のように明るく元気で、3 本の矢 (ARROU) のように結束したという栄誉ある意味です。

超高齢化社会という語句には、年齢的な上でも数の上でも高齢者が増えて、さまざまな問題が生じていると理解されています。しかし、高齢期は決して暗いものばかりではありません。長い人生行路で、いろいろな出来事を見聞し、移り変わる世相から多くのことを学んできたのです。その豊かな知識や見識を、次代に伝えていく義務もあります。失うものも少なくないのですが、得るものも少なくありません。そのことを身を以って示してくれたのが、冒頭に紹介したサンアロウの 3 人の豊かなふれあいと、温かなボランティア活動でした。

話は今を去ること 18 年前のこと、それぞれに定年を迎えると前後して妻に先立たれました。ぽっかりと空いた穴を、従前より趣味としていた俳句に託して、所属する句誌に投じました。

Sさんの句

○妻逝きて 夏夜も長し テレビ消す

Tさんの句

○手折りきて 妻に手向ける姫女苑

Uさんの句

○いつ伸びし 茗荷の花や 妻は亡く

同じ句誌の誌友ながら、互いに仕事にかまけ、逢うこともなく過ぎていきましたが、Uさんの発案で、初めて合同句会に出席して、名を名乗り合い、たちまちに親密になりました。職場における複雑な人間関係や束縛からも解放されて、自由な時間を得て、趣味にも熱中できることに気付きました。それから後は、句会にも吟行会にも常に行動を共にして、「男やもめトリオ」と渾名されるまでになりました。3 人はそれを良しとして、互いに切磋琢磨、作句の腕はますます磨かれて、揃って同人に推挙され、地域の俳句同好会で指導を依頼されるまでに至りました。

それから 13 年、「萩」を兼題とする句会で

○ほつほつと 花咲きそむる 門の萩

○門の萩 妻が形見ぞ 墓問わな

の Uさんの二句が、亡妻への思いが深いとして、絶賛され冒頭をかざりました。

ところがUさんの表情には心なしか翳りが見られました。いち早くそれに気づいたSさんとTさんは句会の帰りに、喫茶店に誘いました。Uさんは二人の気遣いに感謝し、「実はあの二句は、私の懺悔と言つてもよい。今年は妻の13回忌だが、遺骨は山形にあるU家代々の墓に収めたままで、さぞや寂しいだろうと思う。白萩は妻が生前にこよなく好んでいて、自宅の門の脇に手植えしたものだった。主を失い、年々に小さくなってしまったが、季節を違えずに咲くのを見て切なくなってしまった」と切々と心情を語りました。

SさんとTさんは、すかさず「互いに妻の13回忌は同じだ。13年前に定年退職と前後して、妻を失って、ぽっかりと空いた心の穴を読んだ互いの句が互いの心を打つ、交わりが始まった。其の仲立ちをしてくれたのは、他ならないUさん、貴方だった。この際にU家の墓に詣で、妻亡き後に親友を得て、元気に過ごしていることを報告しようではないか」と提案し、Uさんは喜んでこれを受けて、さっそく実行に移されました。

それからまた2年、3人はそろって傘寿を迎えて、某福祉施設で毎月休むことなく、俳句会の指導ボランティアをしています。元気の秘訣を問われ、おもむろに見せてくれたのが、肌身離さず持っているという、この文言でした。

あなたが居てくれる
あなたが見ててくれる
あなたが支えてくれる

あなたと生きていくことが 幸せ



そして、「互いのふれあいを大切に、前を向いて生きること」と明るく答えてくれました。以来、「男やもめトリオ」の渾名は、サンアロウという美しいニックネームになりました。

〈ここでの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 樋場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報は厳正に取り扱います

〈市民のまなざし〉 ★We are not alone シリーズの掉尾を飾るにふさわしい、男やもめ同士のさわやかな友情の物語です。超高齢化社会では「長生きすることのリスクもある」と言つては語弊がありますが、誰もがこのような幸せな晩年を過ごすことができるとよいのですが。★森鷗外の作品に『じいさん ばあさん』という短編があります。るんと伊織という二人の主人公が織りなす美しい夫婦愛の物語ですが、こんな理想の晩年を夢見て家内にも話すのですが、そのたびに笑われてしまいます。きっと、甘い！と言いたいのでしょう。自分の最期をどう迎えるか、この覚悟だけはたえず持ち続けて晩年を過ごしたいと自分自身に言い聞かせています。★執筆と相談室を担当していただいた樋場先生に心から謝意を表したいと思います。複雑で困難な相談が多く寄せられたことを受けて、28年4月以降も本情報誌の執筆と電話相談室を担当していただくことになりました。引き続きご愛顧いただきたいと存じます(h)。

〈ご連絡〉 昨年4月以降に電話相談室に寄せられた102件の相談内容をまとめた小冊子を近日中に発行します。樋場相談員が渾身の力を込めて書きあげた素晴らしい作品に仕上りましたが、なかでも9つの象徴的な事例が新鮮で生き生きと輝いています。ご希望の方は事務局までご連絡ください。